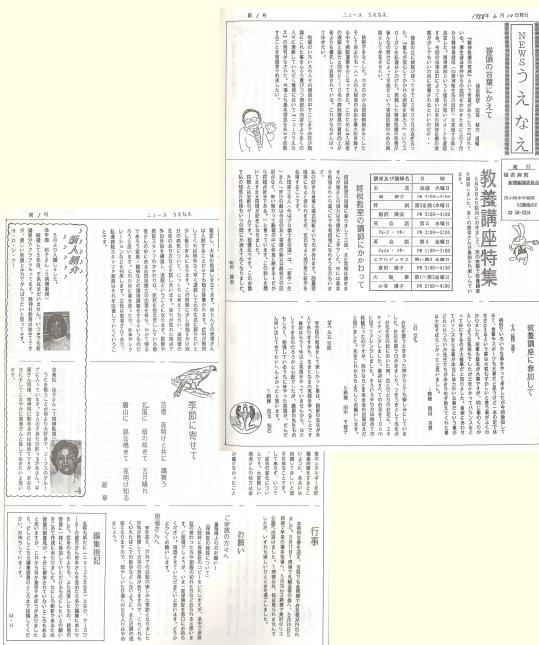


うえなえ

Vol.400 2021.9



「ニュースうえなえ」創刊号



締刷版

ているものが、地域作りの一環を担えるようにと日々取り組んでいる現場の職員と地域で暮らす当事者の方たちを繋ぐことが出来ればと思っております。これからも何か記事になるものは無いか悩む毎日になると思いますが、広報誌が担う役割を意識しながら、400号まで継続する事が出来た自信を糧に500号を目指し頑張っていきます。

広報誌『うえなえ』 発行400号を迎える

広報誌『うえなえ』が今号で400号を迎えました。その歴史を振り返り、これから広報誌について広報委員からの報告です。

「ニュースうえなえ」の始まり

広報誌「うえなえ」は1988年6月に「ニュースうえなえ」として始まり、今号で400号を迎えました。創刊時は有志の患者さん4名とオブザーバーの精神保健福祉士2名などで編集作業が行われ、医療情勢や院内ニュース、文芸にクイズなど入院患者さんに必要な情報が提供・交換される場として発行されていました。その後、退院などの理由でメンバーが辞めていき、編集作業は残った精神保健福祉士が行い、記事の内容も病院の広報誌としてや精神保健の啓蒙啓発へと変化してきました。紙面では1996年のケロコスキー病院との交流や1998年から始まる援護寮建設に向けての取り組みなど、当法人の動向や精神保健・医療に関する記事が掲載されており、歴史を振り返る貴重な記録となっています。特に1996年9月と2006年6月に発行された縮刷版は、植苗病院が歩んだ18年の歴史を克明に刻んでいます。

「ニュースうえなえ」から「うえなえ」へ

2006年6月には18年間続いた愛着ある紙面を刷新。タイトルも「ニュースうえなえ」から「うえなえ」へ変更し、字は一回り大きく、写真やイラストを増やし、白黒からカラーとなり読みやすく分かりやすいものになりました。紙面も社会医療法人こぶしの活動を多くの人に伝えるためとなり、その流れに沿うように内容も変わってきました。

現在は、広報誌だけではなくホームページやブログの更新も広報委員会で行っています。広報誌「うえなえ」だけではなく、私たちが発信し

カラー化第1号



自立訓練施設「蓮げ荘」 管理者 大山智昭

第6回 自立訓練施設「蓮げ荘」管理者 大山智昭さんに聞く！

広報委員：大山さんの略歴や現在のお仕事について教えてください。

大山さん：文系の大学を卒業後、福祉系の夜間専門学校に通い身体障害者施設に就職しました。約9年間働いた後、生活環境の変化を機に「せっかくだから違う分野の仕事をしてみたい」と今の職場に生活支援員として8年前に来て2年前より管理者をしています。現在、入所希望者の見学・体験・入所の調整、生活訓練を通した金銭や体調の管理、調理や掃除、洗濯などの生活スキルを習得する支援や退所後の将来を見据えた相談支援などをする仕事を中心にしています。

広報委員：芦田さんからの質問で「蓮げ荘では法人内に医療機関や就労支援事業所、地域包括支援センター等、たくさんの支援機関があると思いますが、そのことによる“強味”と、そのような中でも課題に感じることがあれば教えて下さい。また、今後、地域でどのような就労支援事業所がいたら良いと思いますか？」

大山さん：医療・福祉・障害・高齢者と様々な分野の業態が同一法人内にすることで、支援者間での連絡調整がスピーディーとなり、利用者さんのニーズに沿った生活や、必要となる生活の選択肢を増やせる事や、法人の母体が病院という点でも、医療に繋がりやすく、治療→支援、支援→治療というように切り替えやすいと感じています。課題としては、障がいの方の高齢化による対応の困難さを感じている中で今後どのような支援をすればいいか、考えさせられています。特に、65歳以上でADL（日常生活動作）が自立されている方からの相談が増えている印象です。

広報委員：医療機関との「連携」についてどう考えられていますか？貴法人内の千歳病院との違いはありますか？

大山さん：当施設では、事前情報や数回の体験宿泊を通して入所の判断となります。集団生活・生活リズムなどが今までと異なる環境での生活は大変なストレスとなり、体調を崩すことがあります。その際には、緊急受診や入院相談などの調整が必要となるため、医療機関との連携は必須です。また、同法人内の千歳病院以外との医療機関とも同様の連携が取れていて大変ありがたいと思っています。

広報委員：今後どのような「連携」ができたらいいとお考えですか？

大山さん：施設の役割として、「自立を目指して訓練をする」ため退所後の生活の場をどう確保していくかがとても大切になってきます。単に「住む場所」だけでなく「日中をどう過ごすのか・活動をしていくのか」「医療の継続性」などより一層地域に目を向けて支援していく必要があります。このため、様々な関係機関と「一緒に相談しながら」支援していくける関係作りがなければと考えています。

広報委員：最後に千歳市社会福祉協議会の榎間さんへの質問をお願いします。

大山さん：貴施設で実施している「日常生活自立支援事業」の利用者はどれくらいいますか？また、その事業から「成年後見制度」の利用に移行した事例や市民後見の方の実際の活動についても教えていただければ嬉しいです。

広報委員：今後もどうぞよろしくお願いします。ありがとうございました。



利用者さんの作品と一緒に

活動報告



お花の会（植苗病院）

緊急事態宣言が発出されたため、8月のお花の会が中止となり、使う予定だったお花を担当者が夏のアレンジメントにしていました。院内の色々な所に飾られており、夏の爽やかさを演出してくれています。

農耕（植苗病院）

今年の農耕活動では写真にあるピーマン、しし唐、茄子、じゃがいもの他にも、ささげやミニトマトなど夏の暑い日差しをいっぱい浴びた色鮮やかな野菜がたくさん収穫されました。この感じだと秋の収穫も期待できそうですね。



東京五輪が終わりました。大会関係者の問題発言が取り沙汰された果てに、このコロナ下で開催して得られたオリンピックレガシー（後世に引き継ぐものごと）は、何だったのかをふと振り返りました。

主催者が事前に掲げていたレガシーを読むと聞いたことのある美辞麗句ばかり。おもてなし？選手村をマンションに？どうもしっくりきません。既にあるものを磨くのが得意な日本とでも言いたいのか、特に理念のないお金持ちの遊びに

振り回されただけなのか。

2012年のロンドン大会では、パラリンピックを「チャンネル4」（日本のNHKのようなBBCではありませんでした）が放映。同局は若者やマイノリティを対象とする先進的な放送局で、パラスポーツや障がい者への理解に追い風を送り、この精神がレガシーとなりました。「自分たちのことは自分たちで考えて決め、周りが理解する」社会のあり方を体現していましたし、東京の閉会式で次回開催地パリの屋根を自転車が駆け抜けた映像もそれを予感させます。かたや日本の組織は…。

ただ、東京大会で行われた新種目スケートボードには、多くの人が希望を感じ取ったと想像します。各人の巧みな演技後ハイタッチで迎えられ、世界トップの選手が表彰台を逃しても、各国選手が抱え上げ健闘をたたえました。その選手たちにとっては当たり前の行動が感動を呼びました。組織が役立たずなら、こうした個々人の振る舞いが「日本をモヤモヤさせている何か」を変えるレガシーになればと願います。

(K.S)

お 知 ら せ

2021年8月16日よりご自宅でオンライン面会が可能になりました。

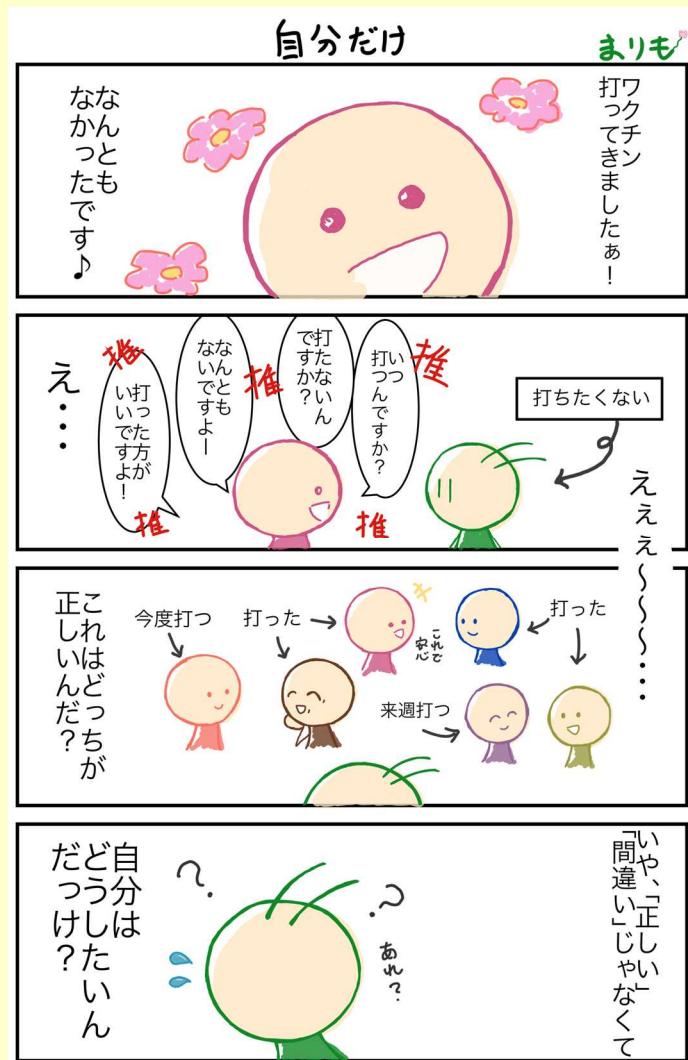
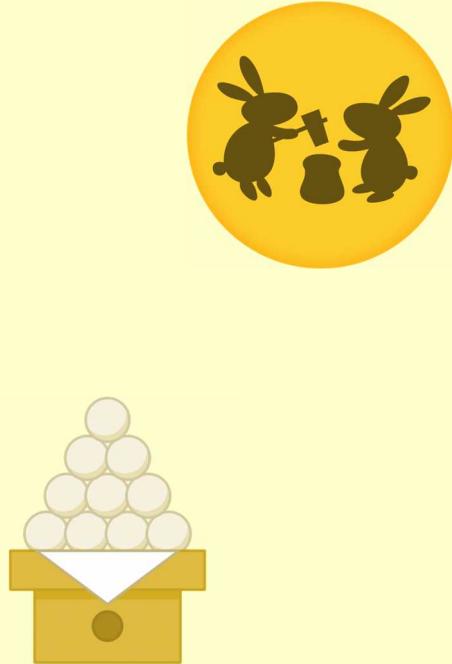
ただし、下記の条件が必要になります。

- リモート面会同様に **事前予約** は必要です。
- ご自宅のパソコン又はタブレット・スマートフォンにZoomアプリがインストールされている。
- 過去にZoomで通信を行った事があり、操作および通信環境（Wi-Fi）など支障なく使用することが出来る。

※当院ではZoom(ズーム)の使用・操作方法等についてのご説明は出来ませんのでご了承下さい。

※面会者が使用する端末（スマートフォン等）のデータ通信料（ギガ）は、面会者様のご負担となりますので予めご了承下さい。

ご自宅でオンライン面会を希望される方は、病棟師長に申し出てください。



病む人と出会い

病む人を支え

病む人に学ぶ

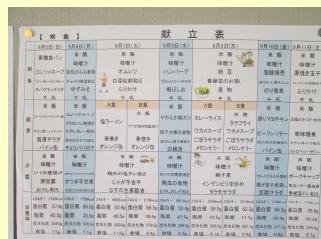
発行

社会医療法人こぶし広報委員会

苦小牧市字植苗52-2

TEL:0144-58-2314

<http://www.uenae-hp.or.jp/>



病院食の献立です

〈後記〉

最近、体が痛くなったり体の違和感・不調を感じることが多くなりました。健康でいる事の有難さ、大きさをつくづく感じます。私の元気の源は食べる事です。食べる事が大好きです。おいしく食べれることに感謝です。(Y)